



Title	パリはなおも燃えている : ボールルーム・カルチャーと新たな親密圏／公共圏の生成
Author(s)	魚住, 洋一
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2023, 5, p. 102-121
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/90082">https://doi.org/10.18910/90082</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 特集 4 生き延びることの倫理：

非規範的なジェンダー・セクシュアリティとボールルーム・カルチャー

パリはなおも燃えている  
——ボールルーム・カルチャーと新たな親密圏／公共圏の生成——

魚住 洋一

R&B のスウェイビートが鳴り響くなか、華麗な衣装に身を包んだパフォーマーたちが、MC のがなり声と観衆の喝采を浴びながら、ファッション・モデルのようにランウェイを「ウォーク」する——そうした光景が繰り返し映し出された、ジェニー・リヴィングストン監督『パリは燃えている』(*Paris Is Burning*、邦題『パリ、夜は眠らない』)。この映画がリリースされてから、すでに 30 年余の歳月が流れた。ドキュメンタリー映画であるにもかかわらず多大な興業収益を上げたこの映画は、1980 年代末ニューヨーク市ハーレム地区でしばしば開催された「ボール」(ball)をドキュメントしたものだが、そこに登場するパフォーマーや観客は、アフリカ系、ラテン系のゲイやトランスジェンダーの人々であり、貧困、  
レイシズム ホモフォビア トランスフォビア 人種差別、同性愛嫌悪、トランス嫌悪、さらには HIV/エイズ感染の不安のなかで生きる彼女ら／彼らは、互いに「マザー」や「チルドレン」となって「ハウス」と呼ばれる擬似家族を作り上げ、差別され抑圧された状況を生き延びようとしていたのだが、ボールはそうしたハウス間で競い合う「ダンスの闘い」、それぞれが、「女装して登場するブッチ・クイーン」  
(Butch Queen Up in Drag)をはじめとして、大富豪、スーパーモデル、ピンナップガール、エクゼクティブといったその理想の姿に自らを変身させ、カテゴリーごとにその変身の「リアルネス」を競い合う闘いだったのである。

『ニューヨーク・タイムズ』は、1993 年、ジェシー・グリーンによる「パリは燃え尽きた」というコラムを掲載した。「レジェンダリー」と呼ばれたあるハウス・マザーの盛大な葬儀、エイズ関連死により亡くなった彼女の葬儀の場面から筆を起こしたグリーンは、ハーレム地区のボールから生み出された「ヴォーギング」(Voguing)——「ウォーク」しながら静止し、雑誌『ヴォーグ』の表紙写真のようなポーズを取って「見得を切る」ダンス・スタイルを、マドンナがいわば「ゴブル・アップ」  
ことで、彼女の大ヒット曲「ヴォーグ」が作り上

げられた例を挙げながら、ヴォーギングや<sup>ドラッグ</sup>女装が商業資本に「搔っさらわれて」、テレビや雑誌、ファッション・ショーなどに登場するようになると、ほとんどの大衆はボールに見向きもしなくなった、と述べ、「パリはもう燃えてはいない、燃え尽きてしまった」と語っていた。そればかりではない。『パリは燃えている』に出演した他のレジェンダリーたちもまた、エイズ関連死などにより、時を置かず次々と亡くなっていったからである[魚住 2017: 23f.; 32f.]<sup>1</sup>。それを知った私は、もはや「パリ」は壊滅したと思わざるをえなかったのである。

ところが、改めて調べていくうちに分かったことだが、このいわゆる「ボールルーム・カルチャー」あるいは「ハウス／ボール・カルチャー」は、「燃え尽きた」どころか、逆に全米中に、さらにはカナダなどの都市にも拡散して広がり、30 年を経た今もなお脈々とその息吹きを伝えていたのである。

私はここで、このボールルーム・カルチャーにおけるボールとハウスの関係に焦点を当てながら、人種的／性的マイノリティの人々にとって、彼女ら／彼らを庇護してくれる避難所、血縁家族に代わりうる新たな「親密圏」となった疑似家族としてのハウスのありかたについて考察しつつ<sup>2</sup>、併せて、彼女ら／彼らが HIV/エイズ危機に直面したその状況を踏まえながら、ハウス間の競技的な相互関係から成り立つこのボールルーム・コミュニティが、彼女ら／彼らにとってはたして政治的抵抗の拠点となりうるか、つまり、ナンシー・フレイザーのいう「サバルタン対抗的公共圏」(subaltern counterpublic)となりうるか、その可能性についても検討したいと思う<sup>3</sup>。ボールルーム・カルチャーの近年の諸事情については、デトロイトのあるハウスのメンバー、マーロン・M・ベイリーが、合州国のいくつもの都市での調査をもとに、2013 年に公刊した『ブッチ・クイーン、パンプス履いてご登場』などに手掛かりを求めたい。

<sup>1</sup> 引用については、本文中の[ ]内に著者名、出版年、ページ番号を表示する。邦訳のあるものについては、原著と邦訳のページ番号をスラッシュで区切って表示する。ただし、翻訳については、原文に照らし合わせ一部変更を加えた。

<sup>2</sup> ここでは、「親密圏」(intimate sphere)を、齋藤純一に倣って、人々の〈間〉にある共通の問題への関心によって成立する「公共圏」(public sphere)に対し、「具体的な他者の生／生命への配慮・関心によって形成・維持される」圏域として理解しておく[齋藤 2000: 92f.]。

<sup>3</sup> こうした問題については、私は[魚住 2017]および[魚住 2018]ですでにいくらかは論じているが、このたび改めてこれらの問題を取り上げるに至ったのは、私がおのれ問題にしたのが、『パリは燃えている』でドキュメントされた 1980 年代末の状況に限られており、また、「パリは燃え尽きた」というグリーンの所見をそのまま受け入れたことなど、現状認識を見誤ったところや不十分なところがあったためでもある。

## 1. ハウス／ボール／パフォーマンス

ハウスとボールの相互連関からなるこのボールルーム・カルチャーは、1960年代にハーレム地区で生まれたとされる。——そもそもボールは、19世紀末ストレートのための仮面舞踏会で登場し、第二次大戦後クラブで演じられるショー・ビジネスともなったドラッグが、観客もまた踊りの輪に加わるかたちで進化した結果生まれたものだが、しかし、そこで生まれたのはあくまでも白人中心のボールであり、非—白人は、ともすれば締め出され、女装して参加しようにも「白塗り」のメイキャップを強要されるありさまで、そのことに業を煮やした人々が「すべてブラック」のボールを始めようとしたことが、ボールルーム・カルチャー誕生のきっかけだった。そして、その存在を世に知らしめたのが、まさに『パリは燃えている』のリリースだったのである[Hilderbrand 2013: 44-47]。さらにその後も、ボールルームに関わるドキュメンタリー映画やテレビ番組が何本も製作されることになる<sup>4</sup>。このことは、一方において、マドンナの「ヴォーグ」などとともに、ボールルーム・カルチャーの商業資本による「搔っさり」、その商品化による横領に拍車を掛けることにもなるが、また一方において、隠れるようにして生きてきたアフリカ系、ラテン系の LGBT の人々に、ボールルーム・コミュニティの存在を知らしめ、新たなコミュニティの構築に繋がったのではなかろうか。事実、1990年代から2000年代初頭にかけて米国とカナダの主要都市では、そうしたコミュニティの単位となるハウスが次々と作り出され、しかも、それらのハウスは、互いに擬似親族関係を結んで繋がり合っていた。さらに近年では、インターネット・テクノロジーの発達により、各種ソーシャル・メディアを介した発信、ハウス／ボールについてのさまざまな発信が可能となり、全米規模のボールも開催されることになったが、さらには、北米中あるいは欧州や日本までも張り巡らされたボールルーム・カルチャーのネットワークさえ生み出されたのである[Bailey 2013: 4ff.; 96f.; 119; 223]<sup>5</sup>。

<sup>4</sup> ドキュメンタリー映画としては、*The Aggressive* (Director: Daniel Peddle, 2005)、*How Do I Look* (Director: Wolfgang Busch, 2006)、*Kiki* (Director: Sara Jordenö, 2016、邦題『キキ——夜明けはまだ遠く』)がある。またテレビドラマとしては、ケーブルテレビ FX により、2018年6月から2021年6月まで放映された *Pose* がある。これは、トランスジェンダーの俳優を多く起用して、ボールルーム・コミュニティを描いたドラマである。ちなみに、このドラマは日本でも、FOX チャンネルにより一部放映、Netflix により一部動画配信された。

<sup>5</sup> 日本にこのカルチャーを伝えたパフォーマーとしては、コッピ・ミズラヒ (Koppi Mizrahi)

前置きはここまでとしたい。ここで改めて確認しておきたいのは、アフリカ系、ラテン系の LGBT の人々が置かれたインターセクショナルな幾重もの抑圧状況である。レーガン、ブッシュ政権下に台頭した新保守主義、キリスト教原理主義による黒人や同性愛者への差別の深刻化、さらには両政権の新自由主義政策による貧富の格差の拡大——そうした状況が継続し、トランプ政権下に至ってはそれがさらに泥沼化するなかで、労働者階級に属するアフリカ系、ラテン系の LGBT の人々は、非白人であるがゆえに一般社会から、さらには白人の LGBT コミュニティからも除け者にされ、その非典型的 (nonconformable) なジェンダー／セクシュアリティのありかたゆえに、家族や教会など、その人種的コミュニティからも締め出され、暴力や虐待、耐え難い住居環境やまったくのホームレス、あるいは、教育格差、不完全雇用や失業による貧困状態に苦しめられていた。この状況をさらに悪化させたのが、1980 年代初頭以来の HIV/エイズ・エピソードだった。エイズをゲイや薬物常用者の疫病だと決めつける行政、メディア、教会の誤ったプロパガンダにより、ゲイへの非難の波が高まったこと、さらには、白人中間層のゲイ感染者に当初対策が集中したため、もっとも多数の感染者を出した黒人への対策が遅れたことなど、その影響は甚大であった。そうした窮状に陥った彼女ら／彼らを迎え入れてくれたのが、まさに「家なき者たちの家」、ハウスだったのである。

私がまず問題としたいのは、このハウスとボールとの関係、「ボールがなければハウスはない、ハウスがなければボールはない」とベイリーが語っているようなハウスとボールのいわば相互構成的な関係であり [Bailey 2013: 127]、さらには、そこで生み出された新たなジェンダー・システムがボールにおけるパフォーマンスと密接に関連しているということである。

ハウスとボールの関係については、『パリは燃えている』の映像からだけでもそれを窺い知ることができる。「ハウスはゲイのストリート・ギャング。ギャングは街で争うけれど、ゲイのハウスはボールで勝負するのさ」と登場人物の一人は語る。彼女ら／彼らは、属するハウスの名誉を賭けてそのパフォーマンスを競い合うのである。「シェイド」(Shade)や「リーディング」(Reading)といった侮蔑の言葉が投げ交わされる罵倒合戦がそこで繰り広げられるのも、そのためである。してみると、それがハウス同士の闘いだからこそ、ボールは興奮に沸き返るのだし、また、同じハウスのメンバー間の一体感も高められ、空想上の「家」

---

の名を挙げることができる [Bailey 2013: 223]。

がまるで現実の「家」であるかのように感じられていくのである。それだけではない。グリーンが言及したあのハウス・マザーが享年 28 だったことから知られるように、ハウス・マザーとなるのは、パフォーマンス競技で勝利を重ねたレジェンダリーたちであり、年齢ではなくボールでのパフォーマンスの技量こそが、ハウス内でのメンバーの地位を決定づけるのである。ハウスは、まさにボールにおけるパフォーマンス競技を通じて繋がり合う疑似家族なのである[魚住 2017: 29]。

ところで、ベイリーは、ボールルーム・カルチャーのなかから、新たなジェンダー・システムが作り出されていったと言う。それは、ボールに集う人々にとって、性差別的、<sup>セクシスト</sup>ヘテロセクシストの社会が作り上げた男／女、異性愛／同性愛という <sup>バイナリー</sup>二分法の枠組みをもってしては、彼女ら／彼らのジェンダー／セクシュアル・アイデンティティのありかたを収め切ることができないからであり、そうした枠組みを超える多様なジェンダー／セクシュアリティのありかたが、ボールのパフォーマンスの主要なカテゴリーとして生み出されていったのである。——私は、「パフォーマンスのカテゴリーとして」という言い方をした。ベイリーによれば、ボールルーム・コミュニティのメンバーにとって、パフォーマンスはその「私」を飾り立て作り上げるセルフ・ファッショニング、自己の <sup>リメイク</sup>作り直しにほかならず、彼女ら／彼らのジェンダー／セクシュアリティは、それぞれのカテゴリーに即しつつ演じられるパフォーマンスによって文字通り「<sup>プロデュース</sup>生産」されるのであって、一般社会においてそのジェンダー／セクシュアル・アイデンティティを否認され、拒絶された彼女ら／彼らは、そのアイデンティティを何としても回復させるため、その「承認」を求めてパフォーマンス競技を競い合うのである。つまり、ここでは「自己感覚を一変させうるようなコミュニティからの承認とステータスの獲得」こそが問題なのであり、そのためにはパフォーマー一人のパフォーマンスだけではならず、DJ がミックススピンするヒップ・ホップ、観衆の喝采や <sup>はや</sup>囃し声、コメンテーターの批評、審査員が下す評価、贈呈されるトロフィーや賞金等々、ボールに集う人々のそうしたさまざまな振る舞いが「<sup>コミュニティ</sup>共同パフォーマンス」となってはじめて、それは可能となるのである[Bailey 2013: 30ff.; 45ff.; 204f.]。

ここで思い出したいのは、ジュディス・バトラーが、ドラッグ・パフォーマンスに関して、<sup>アクト</sup>「演技は現実と対比されるのではなく、ある意味で新たな現実、つまり、ジェンダーの現実を規整する既成の枠組みに容易には馴染まないジェンダーの様式を構成する」と語っていたことである [Butler 1988: 527/ 67]。ボールルーム・コミュニティは、男でも女でもない新たなジェンダー／セクシュアリティの現実がパフォーマティヴに生み出されうるとす

るバトラーのこの主張、彼女のいう「ジェンダー地勢図を増殖させる (proliferating gender configuration) パフォーマティヴな可能性」をそのまま体現しようとするコミュニティであるかのようである[Butler 1999:180/ 248]<sup>6</sup>。

ところで、私には一つの疑念がある。それは、『パリは燃えている』に映し出されたボールルームのありかたとベイリーが報告するありかたに微妙なずれがあることである。『パリは燃えている』では、「ボールは、ボくらにとって現実そのもの、名声や成功、脚光を浴びるスターに近づくんだ」、「ボールは、オスカーを手にしたスーパースターや一流モデルになる夢を与えてくれる」といった登場人物たちの声が収録されていたが、彼女ら／彼らがパフォーマティヴに変身しようとした理想の姿とは、スターやモデルであれ、エグゼクティブであれ、富裕層の白人たちの姿以外ではない。彼女ら／彼らは、「白人の国アメリカ」<sup>ホワイット・アメリカ</sup>においてはけっして手にすることのない夢の姿にひととき変身しようとしたのではないか、と私は感じたのである[魚住 2017: 19-21]。ところが、ベイリーの報告するところでは、ハウス名にオートクチュール名を名乗るハウスが多いこと、パフォーマンス競技のカテゴリのなかに「ハイファッション」や「エグゼクティブ」と銘打ったものも見られることなど、そうした変身願望の表れがありはするものの、それでもそれは背面に退いており、一般社会で否認されたメンバーたちのジェンダー／セクシュアル・アイデンティティの回復という動機がより前面に出ているとの印象を受ける<sup>7</sup>。取りあえず、このことは疑念としてそのまま書き記しておく。

さて、ベイリーが、ボールルーム・カルチャーのなかから新たに作り上げられたジェンダ

---

<sup>6</sup> もっとも、バトラー自身は、『ジェンダー・トラブル』執筆後、異性愛規範を攪乱<sup>サブヴァート</sup>としていたドラッグが、逆に異性愛規範を模倣しそれを再強化するものだとして、その主張を改めている。また彼女は、そうしたことを述べたインタビューのなかで、『パリは燃えている』の攪乱的な部分は、親族関係の編成をラディカルに再文脈化した「ハウス」の構造にこそあり、ドラッグの場面はそれほどでもない、とも語っているが[魚住 2018: 12]、この発言は、ハウスとボールでのパフォーマンス競技の相互構成的関係を見逃している点で、きわめて不十分なのではなかろうか。

<sup>7</sup> 『パリは燃えている』には、あるレジェンダリーが、白人女優の物真似はしたが、黒人歌手の真似をしようとは思わなかった、と語る場面がある。その発言を受けて、ベル・フックスは、ここには「白人女の物神<sup>フェティッシュ</sup>としての理想化」が見出される、と述べていた[魚住 2017: 20]。しかし、ベイリーは彼女に反論し、黒人のドラッグは、彼女ら／彼らにとって馴染み深い黒人音楽、R&Bと結びついており、白人ではなく黒人の歌姫の扮装をするのがもっぱらなのだ、と指摘している[Bailey 2013:132; 242]。おそらく、そのレジェンダリーが白人女優の真似をしたのは、白人中心のボール、「白塗り」のメイキャップの時代だったのだろう。

ー・システム、パフォーマンス競技のカテゴリーともなるシステムとして挙げているのは、次の6つのカテゴリーである。ただし、彼自身注釈しているように、これはセクシュアリティにも関わっており、厳密にはジェンダー／セクシュアリティ混合システムである。

- (1) Butch Queens Up in Drag: 女装してパフォーマンスをするが、<sup>ウィミン</sup>女として生きているのではないゲイの<sup>メン</sup>男。
- (2) Femme Queens: ホルモン投与や豊胸手術などによるジェンダー移行の諸段階にあるMTF (Male to Female) トランスジェンダーの女。
- (3) Butches: ホルモン投与や乳房切除などによるジェンダー移行の諸段階にあるFTM(Female to Male)トランスジェンダーの男、ないし、男役のレズビアン、そのセクシュアリティに関わらず男として出場する〔生物学上の〕フィメール(female)。
- (4) Women: レズビアンにせよストレートにせよクィアにせよ、女として生きる生物学上のフィメール。
- (5) Men/Trade: 男として生きる男性的でストレートの生物学上のメール(male)。
- (6) Butch Queens: ゲイないしバイセクシュアルの男として生きる生物学上のメール、男性的でも女性的でもありうる。

[Bailey 2013: 36]<sup>8</sup>

しかし、ボールルーム・コミュニティのメンバーたちは、なぜこうしたジェンダー・システムを作ったのだろうか。「性」のありかた、ジェンダー／セクシュアリティのありかたは、かつてジョン・マナーとパトリシア・タッカーが『性の署名』で語ったように、それぞれの署名の書体と同じく、ひとそれぞれに異なるはずであり、男／女、異性愛／同性愛という異性愛規範の二分法の枠組みのみならず、ボールルーム・コミュニティが設定する枠組みにも収まり切れないはずである。これらの枠組みはいずれも、ジェンダー／セクシュアリティのありかたを鋳型に嵌め込んで、それに金縛りにさせる危険があるのではないのか。ベイリーは、この点に触れてこう述べている。「ジェンダー・システムは、固定的であると同時に流

<sup>8</sup> 一般に「ドラッグ・クイーン」と呼ばれているのは、(1)の「女装して登場するブッチ・クイーン」のことである。ベイリーによれば、一般にはフェム・クイーンがドラッグ・クイーンと区別されず混同されており、ボールが「ドラッグ・ボール」と呼ばれるのもこうした混同による[Bailey 2013: 38]。私も、[魚住 2017]、[魚住 2018]においてこの過ちを犯した。陳謝したい。



動的でもある……。それは、一方ではジェンダーとセクシュアリティの規範を具現するが、他方ではメンバーが当の規範を攪乱する手段ともなる」[Bailey 2013: 79]。彼は何を言っているのか。彼が言っているのは、このシステムは、厳格に区分されているようで、実はその区分を不安定化し、流動化させる仕組みを忍び込ませている、ということである。たとえば、そのセクシュアリティによってブッチ・クイーンの区分に組み込まれたゲイたちがなすジェンダー・パフォーマンスは、女性的でも男性的でも両性的でもありうるようなジェンダー横断的なものであるし、逆に、トランスジェンダーの男たちが組み入れられたブッチの枠組みには、さまざまなセクシュアリティをもつ者たちが混在し、しかもこのカテゴリーには「フィメールの身体」をもつ男／女が共に含まれてもいるのである[Bailey 2013: 31; 41]。してみると、男／女、ゲイ／レズビアン／バイセクシュアル／ストレートというジェンダー／セクシュアリティの従来の区分を越境する仕組みを組み込むことによって、異性愛規範を攪乱させるとともにそれ自体をも自己攪乱させるのが、このシステムなのだと言えよう。——いずれにせよ、このシステムに依拠しつつではあるが、ボールルーム・コミュニティのメンバーたちがその「性」のありかたを具現するのは、結局はそれぞれが為すパフォーマンス、それぞれに相異<sup>あいこと</sup>なったセルフ・ファッショニングによってなのであり、ベイリーが語っているように、彼女ら／彼らにとって、生物学上の性<sup>セックス</sup>／ジェンダー／セクシュアリティはいずれも、ひとが生得的に誰であるかではなく、ひとが何を為すかに関わっているのである[Bailey 2013: 31]。

## 2. ハウス／ホーム

次に取り上げたいのは、「家なき者たちの家」、擬似家族としてのハウスである。ハウスを構成するのは、マザーとチルドレンの他に、『パリは燃えている』以降にさらに加えられたファーザーとであるが、チルドレンは、そのボール歴によって長幼の序が定められ、互いに兄弟姉妹(Siblings)としての擬似的関係を結ぶ。ベイリーによれば、ハウスのメンバー間には、ペアレンツとチルドレン間も含めて、ロマンティック／セクシュアルな関係が認められるものの、マザーとファーザー間の関係は、ロマンティック／セクシュアルなものではないとされる。いずれにせよ、ハウスのメンバー間の紐帯は総じて、血縁／異性愛家族の紐帯とされる「愛」ないし「性愛」ではなく、すでに述べたように、ボールでパフォーマンス競技をともに闘う者同士の連帯感、「ハウスのためにトロフィーを〈カッコよく決めて搔っ

さらい〉(slay and snatch)たいという共通の競争心」によるところが大きいと思われる[Bailey 2013: 113; 116-118]。——しかし、ジュリア・ディクソン=ゴメツたちは、ハウスが競技に集中しすぎて、ハウス内の人間関係を壊したり、黒人コミュニティ全体との関わりの妨げになることがある、との発言や、「いつだって、ハウスから抜け出す者が居る。……才能をちゃんと発揮できなければ、ハウスがそいつを叩き出すことだってあるんだ」といった発言をハウスのメンバーから聞き取ったことから、「ボールの競技的な側面は、形成された家族関係を不安定化することもある」との指摘を行なっているが、このこともまた、逆にハウスとボールの相互構成的関係を証拠立てているのではなかろうか[Dickson-Gomez et al. 2014: 2162]<sup>9</sup>。

ところで、すでに述べたように、こうした親族関係は複数のハウス間にも拡張され、祖父母、孫、叔父叔母、従兄弟等々の関係がそこに作り出されていった。この親族関係のネットワークは全米規模にまで及び、現在では多くのハウスがこのネットワークに所属している。このネットワークを取り仕切る者は、オーヴァーオール・ペアレンツと呼ばれ、彼女ら／彼らが携わるのは、<sup>チャプター</sup>支部のハウスの開設と閉鎖、ペアレンツの指名と解任、メンバーへの役割の割り当てなどである[Bailey 2013: 95-97]。

ハウスには2つの役割がある。一方では、ハウスは、血縁家族から縁を切られ、あるいは、その悪罵やDVから逃れた者たちにベッドや食事や金銭を与え、セックスやトラブルなどの相談にも乗り、就労や就学などの支援を行なう等々、彼女ら／彼らに避難所を提供する役割を果たすのだが、もう一方では、ボールでのパフォーマンス競技をともに闘うメンバーとして、彼女ら／彼らの衣装材料の入手や縫製の手助け、パフォーマンスの指導を行なったり、さらには技量や容姿の秀でたパフォーマーをリクルートしたりもするのである。

この役割を主に担うのは、ハウス・マザー／ファザーであるが、夫婦間の「性愛」に基づくとされる異性愛家族とは異なり、ハウスはそれに基づかないにもかかわらず、マザー／ファザーが担うのは、それぞれ、<sup>ナーチャー</sup>子育てすること／<sup>ガイド</sup>皆の手本となることであって、ここにはマザー／ファザーの私的／公的領野への振り分けがあり、異性愛家族のありかたを

<sup>9</sup> ただし、ハウス／ボールの相互構成的関係を強調するベイリーに対して、ディクソン=ゴメツたちは、「構築された家族」の伝統は19世紀末、さらには家族がしばしば売り払われもした奴隷制の時代にまで遡るものであり、ボールルーム・カルチャーとは無縁の、ハウスに加入しない構築された家族(non-house-affiliated constructed family)も存在するし、またハウスに加入しても、元の家族との関係が維持される事例も多い、と反論している [Dickson-Gomez et al. 2014: 2157; 2159]。

そのまま模倣した性差別的な性別役割分担となっていることは否定しがたい。——女としてのアイデンティティをもたない者がマザーの役割を担うことがあるとしても、である[Bailey 2013: 106; 111]。

ハウスに男／女の <sup>バイナリー</sup>二分法 と性差別が忍び込んでいることを問題とするならば、さらに問わねばならないのは、ハウスをヘゲモニックに取り仕切るマザー／ファザーとなるのがいずれも、ボールルーム・コミュニティのマジョリティ、ゲイ男性のブッチ・クイーンであることがきわめて多いことであろう。このことが物語っているのは、一般社会の <sup>セクシズム</sup>性差別、<sup>ミソジニー</sup>女性蔑視 がボールルーム・カルチャーに紛れもなく浸透し、「主としてブッチ・クイーンが、彼らの優位を維持しようとして仕組むさまざまなかたちの排除がかつてあったし、いまなおあり続けている」とベイリーが語るような、「<sup>フェムフォビア</sup>フェム嫌悪 とトランスフォビア」がボールルーム・コミュニティに <sup>はびこ</sup>蔓延 っているということにほかならない。なかには、異なる者たちを誰彼なく締め出した「男性的なブッチ・クイーン・オンリー」のハウスさえあるという<sup>10</sup>。——ただし、ベイリーは、「ボールルームでは、フェム・クイーン、ウィミン、ブッチが、排除的な慣行に異議を申し立て、彼女ら／彼らを従属せしめる境界設定とヒエラルヒーに抵抗し続けている」と述べ、近年ボールルーム内での勢力も増大させつつある彼女ら／彼らの尽力による改革、たとえば出場できるカテゴリーが少なかった彼女ら／彼らのためのWBT シーン(the Women, Butches and Transgender scene)が開催されるようになったことにも言及している。しかし、彼によれば、このWBT シーンにおいても排除が「複製」され、今度は、男性的なウィミンとブッチが女性的なウィミンとフェム・クイーンを周縁化し抑圧する事態が生じたともいう。「新しい <sup>インクルージョン</sup>包摂 の空間を創造することが同時にさまざまなかたちの <sup>エクスクルージョン</sup>排除 を具現してしまう」こうした事態について、ベイリーは、この包摂と排除の間のわずかな <sup>はざま</sup>狭間 からこそボールルームの創造的なありかたが生み出されてくるのではないかと、淡い希望を述べているだけである[Bailey 2013: 43; 50f.; 224-226]。

ボールルームのこうした性差別的な状況を省みながら、私はこう問いたくなる——人種的／性的マイノリティの人々にとって、そもそもハウスは、彼女ら／彼らを匿ってくれる子宮のような「ホーム」、あの「埴生の宿」("Home! Sweet Home!")に歌われたような「ホー

<sup>10</sup> エスター・ニュートンは、ドラッグについての古典的著作『マザー・キャンプ』で、1960年代においても、白人のゲイ・コミュニティで、女装するドラッグ・クイーンたちへのフォビア、さらにはそのドラッグ・クイーンたちの「ホルモン・クイーン」たちへのトランスフォビアが広く観察されることを報告していた[魚住 2017: 14f.]。

ム」になりえたのだろうか、と。ベイリーは、ハウスには「ジェンダーをめぐるかなりのバイアス、軋轢、争い」が見られ、そこは「血縁家族と同じく、ケア、サポート、愛情の場であるとともに、ときには暴力沙汰にもなる争いの場でもある」と語り、そこではマザー／ファザー間の「継続する権力闘争」さえ起こっていることを指摘していた[Bailey 2013: 50; 115]。しかし、それはあらかじめ分かっていたことではないか。——軋轢や争いや暴力のない安全なホームなどというものはどこにもありはしないのだから。

すでに[魚住 2018]で触れたことなのだが、ここで、ホームへの思慕に警鐘を鳴らすボニー・ホーニッグの議論に目を向けてみよう。彼女はまず、バーニス・ジョンソン・リーゴンが女たちのための音楽祭で行なった演説、「ホーム／連合体(coalition)」という対立軸を示してみせた「連合体の政治」を取り上げる。リーゴンは、アイデンティティを共有する者たちだけの「ユアーズ・オンリー」の場所、<sup>かんぬき</sup>門の掛かった部屋としてホームをイメージするが、それは差異、軋轢、暴力を免れた安全な避難所である。他方、連合体は「あなたが生きていられる手立てをそれ以外に思いつかないため、ともするとあなたを殺すかもしれない誰かとチームを組む」——そうした暫定協定的(modus vivendi)なありかたをした政治的な場である。しかし、このホーム／連合体の対置は見せかけのものにすぎない。なぜなら、リーゴンが「避難所などどこにもないのだ。あなたが、そこへ行って自分と同じ人たちとだけ一緒に居ることができるような場所などどこにもないのだ」とこの演説の冒頭近くで語っていたからである。ホーニッグは、この発言を踏まえながら、「ホームを連合体という差異を孕んだ場として意味づけ直し、軋轢、ディレンマ、差異から逃れる安全をホームによってこれまでのように約束することが、もはや不可能であると受け入れること、それは、ホームを否定することではなく、これまでとは別の未来の政治的实践のためにホームを<sup>リカヴァー</sup>奪回することである」と主張する。しかし、彼女によれば、これはきわめて困難な企てである。なぜなら、リーゴンが語ったように、「特定の(非政治的な)場所にホームを求める思慕(home-yearning)は、特定の(政治的で暫定協定的な)目的のためだからといって、抑制することができない」からであり、差異や軋轢やディレンマに引き裂かれてはいないホームを求めるこの熱狂が、一方では内部の差異を外部に投影して、他者に激しい怒りをぶつけるようになり、また一方では、ホームを作り上げるため、内部の異なる声を掻き消そうともするからである。それでも、彼女はこの困難な企ての活路を見出そうと模索している[Honig 1994: 585f./246f.]。

なぜ私がホーニッグの議論をここで持ち出したのか、<sup>けげん</sup>怪訝に思われるかもしれない。ハ

ウス／ボールは、あくまでもパフォーマンス競技を通じて繋がり合う非政治的な場だからである。ベイリーもこう書いていたではないか——「ボールルームのメンバーたちは、彼女ら／彼らから公民権を剥奪するような人種、ジェンダー、セクシュアリティに対する〔マジョリティの〕体系的なヘゲモニーには関心をもたないし、それを解体できるとも考えていない。むしろ、生き残りによりよいクオリティ・オブ・ライフの追求こそがメンバーたちの意図するところなのである」、と[Bailey 2013: 54f.]。もちろん、この発言がメンバーたちからの聞き取りによったものであるならば、社会変革を目指すという意味での政治性がボールルーム・コミュニティに欠如していることは、私としても認めざるをえない<sup>11</sup>。ただ、差し当たり私は、ホーニングを援用することで、そもそも子宮のようなホームなどありえないこと、ハウスおよびボールルーム・コミュニティが、ブッチ・クイーンとフェム・クイーン、ウィミン、ブッチ間の軋轢に示されるような、ジェンダー・システムのそれぞれ <sup>あいこと</sup>相異 なった 6 つのカテゴリーに区分される者たちが織りなす葛藤を孕んだ関わり合いの場、アイデンティティを共有しない者たちの異種混交的な関わり合いの場であり、彼女ら／彼らが、その生き残りとアイデンティティの回復を賭けて「あなたを殺すかもしれない誰かとチームを組む」暫定協定的な場であることを確認しておきたかっただけである。

### 3. エイズ／ボールルーム・コミュニティ

1980 年代初頭、メンバーたちのその生き残りすら危うくしかねない事態がボールルーム・コミュニティを襲う。HIV/エイズ・エピソードの到来である。この事態に対して、このコミュニティはどう対処したのだろうか。——しかし、ウィルスの攻撃以上に激しかったのが、ホモフォビアとレイシズムの攻撃だった。エイズをゲイの病、とりわけゲイ黒人の病だとする風潮が、一般社会や黒人コミュニティに蔓延し、さらにそれが、公衆衛生当局や予防プログラムを実際に実施するエイズ関連民間団体の施策にまで影響を及ぼしたのである。ベイリーは、HIV/エイズ予防基金や医療資源の配分が、ゲイ白人を優先させる不平等なものであったことを指摘しつつ、「HIV/エイズとその予防戦略をめぐる言説は、黒人同性愛者を、<sup>レギュラー</sup>〈通常〉の人々から隔離せねばならない、たえず病みがちな者たちとして <sup>マ ー ク</sup>徴づける ジェン

<sup>11</sup> ただし、ボールルーム・コミュニティがメンバーたちのアイデンティティ回復の場であることが、政治的にも重要であることについては、第 3 節の「対抗的公共圏」に関する議論を参照されたい。

ダー／セクシュアリティのヒエラルヒーに基礎を置いている」と述べている。公衆衛生機関の多くによって、黒人同性愛者は「リスク・グループ」として特定され、諸機関の関心は、残りの公衆を「彼ら」から安全にすることへと向けられ、「彼ら」の安全にはほとんど向けられなかった。——「救われるべきは誰の命か」というその「誰」から篩<sup>ふる</sup>い落とされたボールルーム・コミュニティのメンバーたち、すでにスティグマ化されていた彼女ら／彼らは、エイズ襲来によってさらなるスティグマ化を被り、なかには自らの「価値のなさ」の感情、自己嫌悪感に苛<sup>さいな</sup>まされ、そのメンタル・ケアが必要な者も少なからず居たというのである[Bailey 2013: 192f.; 200f.]。

そうした状況に遭遇したボールルーム・コミュニティのメンバーたちが企てたのは、  
 プリヴェンション  
 予防ハウスと予防ボールの立ち上げであった。予防ハウスは、セックスについて忌憚なく話し合う場を設けて、感染を未然に防ぐセイファー・セックスをメンバーたちに促すため作られたが、ソーシャル・サポートやメンタル・ケアも含めたケアが欠かせない感染したメンバーにとっては、それらを安全に享受できる場ともなったのである。予防ボールは、エイズ関連民間団体とも連携しつつ、HIV 無料検査、小冊子やコンドームの配布などを行ないながら、HIV/エイズ予防に関連するパフォーマンス競技を通して、セイファー・セックスの啓蒙を図ろうとするものであった[Bailey 2013: 206-210]<sup>12</sup>。3,000 名近くの参加者や観客を集めた予防ボールもあったという。しかし、この予防ボールを積極的に評価しようとするベイリーではあるが、彼自身、ボールで「カッコよく」(fierce)することと HIV/エイズ予防とは明らかに目的として矛盾する、と述べているし[Bailey 2013: 209]、ディクソン＝ゴメツたちもまた、ボール参加者の発言のなかに、予防ボールの不成功例があったことやボール参加者の HIV 予防への関心の欠如があったことの指摘があり、その理由として、HIV 予防がボールの楽しさや魅力を奪うこと、構築された家族内での真摯な会話の方がより効果的に予防メッセージを伝えられることが挙げられていたと報告していたのである[Dickson-Gomez et al. 2014: 2165f.]。——ただ、こうした問題を孕みながらも、予防ボールは一定の役割を果たしたのではなかろうか。とりわけ、近年若年化が進行するボールルームにおいて、ハイリスクな性行動を取りがちな「キッズたち」への啓蒙の効果はあったかと思われる。

しかし、エイズ襲来に直面して、ボールルーム・コミュニティが企てたことは、はたして

<sup>12</sup> この予防ボールに類するものとして、日本では、NGO 団体エイズ・ポスター・プロジェクト(APP)によって、1994 年から 2000 年にかけて京都の Club METRO で開催され、ショウタイムとトーク、ダンスタイムから構成されたクラブ・イベント、Club Luv+がある。

こうした相互扶助の取り組み以外にはなかったのか、という疑問が湧く。ベイリーが、他のメンバーたちとともに、エイズ関連民間団体に加わって、その施策の是正を図ったことなどは報告されているが、それはあくまでも個々のメンバーの活動にすぎない[Bailey 2013: 182-203]。エイズ襲来によってもっとも大きな打撃を受けたはずのボールルーム・コミュニティにおいて、なぜ、アクト・アップ(AIDS Coalition to Unleash Power)のような社会運動が展開されるに至らなかったのだろうか<sup>13</sup>。それは、私には判然としない。ただ、すでに私はボールルーム・コミュニティの非政治性について触れたが、もしかすると、この政治性の断念の背景には、強力な外圧、一般社会において公然とカムアウトすることさえ妨げてしまうようなメンバーたちのインターセクショナルな抑圧状況があったのではなかろうか。

それを顕著に示すのが、このコミュニティの外へ一歩でも出れば、メンバーたちを暴力が襲うかもしれないこと、彼女ら／彼らがときには死に至る暴力を被る危険に日常的に晒されていることであろう<sup>14</sup>。彼女ら／彼らが「パッシング」(passing)という手立てを編み出したのは、とりわけその暴力を切り抜けるためであった。パッシングとは、巧みな変装によりコミュニティの外部の社会でストレートとして「通る」ことをいう。だから、彼女ら／彼らにとってパフォーマンスは二重の役割を担うことになる。つまり、一方では、ボールルームの内部で、自らのジェンダー／セクシュアリティを誇示しつつ、思いのままに自らを可視化するため、もう一方では、ホモフォビア、フェムフォビアが蔓延する外部の社会で、自らを不可視化して異性愛者たちのなかへ「溶け込む」ため、彼女ら／彼らはそのパフォーマンスに磨きを掛けるのである。それゆえ、フェム・クイーンの女たちはまるで「本物の女」であるかのように街中で華麗に振る舞い、ブッチ・クイーンのカテゴリーに属する「悪漢マスキュリニティ」(thug masculinity)の男たちは、バギーパンツ、バンダナ、タトゥーで身を固め、威嚇的で危険なストレートの黒人を街中で演じることになる[Bailey 2013: 53-

<sup>13</sup> ニューヨーク市で1987年に設立されたアクト・アップは、その名称に"coalition"を含み、また、エイズ危機に対抗して直接行動に取り組む「諸個人によって作られた多様かつ非党派的なグループ」であると標榜していたにもかかわらず、その主流を占めたのは中間層のゲイ白人であり、参加したレズビアンやアフリカ系、ラテン系のゲイはごく少数であった[佐藤2011: 89f.]。

<sup>14</sup> しかも、暴力はもっとも抑圧され差別された「弱者」に集中的に行使される。NGO 団体ヒューマン・ライツ・キャンペーン(HRC)の調査によると、合州国で銃撃などにより殺害されたトランスジェンダーないしジェンダー非典型(gender non-conforming)の人々は、少なくとも、2021年には50人、2022年にはすでに32人に上る。その多くはアフリカ系、ラテン系のトランスジェンダーの女たちである[Human Rights Campaign 2022]。

58]。しかし、異性愛規範によって枠づけられたこの社会のなかで、差別と排除、暴力と死を免れ生き延びる手立てが、非典型的なジェンダー／セクシュアリティであることを不可視化すること以外にないとすれば、それは、つまり、クローゼットのなかに留まり続けるしかないということではないか。ボールルーム・コミュニティは、巨大なクローゼットだったのだろうか。——あるメンバーはこう語っていた。「女の子たち〔フェム・クイーン〕の多くにとってパッシングって、まあ、アタシがすっかり女っぽく見えたら、誰もアタシに気づかなかったら、アタシの勝ち、ってことなんだよね。でも、そのとき、トランスジェンダーとして勝ったわけじゃない。女だと見られただけなんだ。アンタたちは、トランスジェンダーの子たちから公民権を奪っちゃったシステムに何もしたことはないのさ」[Bailey 2013: 54]。実は、ボールルーム・コミュニティの非政治性についてのあの言葉をベイリーが語ったのは、この発言の引用に続けてのことなのである。

それにしても、ボールルーム・コミュニティが置かれた状況には、個々のハウスやコミュニティの相互扶助的な努力だけでは対処しかねる事態が含まれているのではないか。HIV/エイズ危機に限って考えても、2010 年前後の調査によれば、黒人が白人などに比べきわめて高い HIV/エイズ罹患率を示しており、とりわけ AAMSM(African American men who have sex with men)の罹患率が特に高いなかで[Bailey 2013: 187f.], [Dickson-Gomez et al. 2014: 2156f.], ディクソン=ゴメツたちによれば、1996 年に開発された抗レトロウィルス療法 (ART)の AAMSM に対する実施率はかなり低いと推定されている[Dickson-Gomez et al. 2014: 2166]。ART は、HIV の増殖を防ぐ効果は大きいものの、高額な治療費を要する継続的治療が必要であるため、国民皆保険制度もない合州国で、低所得のボールルーム・コミュニティのメンバーたちが、はたして十分な治療を受けうるか、きわめて疑問である。——ちなみに、ニューヨーク市のボールルーム・コミュニティに対する 2008 年の調査によれば、メンバーの 45%の年収は 10,000 ドル以下、年収が 30,000 ドル以上のメンバーはわずか 18%であったという[Phillips et al. 2011]。思い返せば、ボールルーム・コミュニティのメンバーのなかには、パフォーマンズの衣装やボール参加の旅費を手に入れるために <sup>モッピング</sup> 万引きや <sup>クラブティン</sup> カード詐欺 をする者、「完全な女」になる費用を稼ぐには売春をするしかなかった者も居たのである[Bailey 2013: 72f.], [魚住 2017: 25]。この貧困状態は、まさにこの人種的／性的マイノリティの人々に対する「不正義」、排除と抑圧が不当にも社会的になされたため彼女ら／彼らに塗炭の苦しみを負わせる「不正義」の存在を指し示しているのではなかろうか。

ところで、ベイリーは、ホセ・エステバン・ムニョスに依拠しながら、ボールルーム・コ



カウンターパブリック  
 ミュニティを「対抗的公共圏」として語ろうとする。彼がそう語ろうとするのは、このコミュニティが、異性愛規範によって課されたジェンダー／セクシュアリティの枠組みを取り壊すようなクィアな「性」のありかたをパフォーマティヴに作り上げ<sup>15</sup>、さらには、異性愛にも血縁にも依拠しない親族関係のありかたをも新たに生み出したからであり、そのことによって、性差別的、異性愛主義的な一般社会の言説の軛から自由な空間を手に入れたからである。齋藤純一は、支配的な公共圏において「言説の資源」に関して劣位にあるマイノリティにとって、貶められてきた自らの生のありかたを肯定的に捉え返す新たな言説が生み出される場として「対抗的公共圏」を位置づけてもいたが[齋藤 2000: 14f.]、ベイリーは、ボールルーム・コミュニティがそうした公共圏を言説によってではなく、まさにパフォーマンスによって作り出した、というのである[Bailey 2013: 17-19; 219]。

私は、ベイリーのこの主張には、やはり留保を付さざるをえない。私が留保するのは、「サバルタン対抗的公共圏」の重要性を論じたナンシー・フレイザーの議論を念頭に置いてのことである。周知のように、彼女は、ユルゲン・ハーバーマスの「ブルジョア的公共圏モデル」の諸前提に異議を申し立てた。すなわち、(1)地位の差異を括弧に入れて、あたかも社会的に平等であるかのように熟議し合うことが可能である、(2)議論の拡散を招く競合し合う多元的な公共圏よりも、議論を収束させる単一の包括的な公共圏の方が望ましい、(3)公共圏における熟議は、共通善に関するものに限定されるべきで、私的な利害を問題とするのは望ましくない、というハーバーマスの前提のいずれをも彼女は批判するのである。(1)については、合州国の社会のような階層社会において、サバルタン、つまり、従属的な社会集団は、熟議への平等な参加が形式的に担保されたとしても、齋藤のいう「言説資源の劣位性」のためその参加の条件を実質的に欠いており、したがって、社会的不平等が熟議へ影響することを避けるには、自らのアイデンティティ、利害、ニーズをめぐって対抗的な言説を編み出しながら討議をなしうるような下位の公共圏の構築が欠かせないのではないか、さらに、(2)については、合州国の社会が多文化的であること、また、公共圏が言説による議論の場であるだけでなく、社会的アイデンティティの再形成とその上演／<sup>エンアクトメント</sup>制定の場でもあることを考慮すれば、単一の公共圏の包括性は、多様な文化的アイデンティティのありかたを平板化して、マジョリティの文化集団の規範を普遍化する危険があるのではないか、加えて、(3)

<sup>15</sup> ベイリーは、「クィア」を「レズビアン／バイ／ゲイ、ストレート／異性愛者、〔生物学上の〕メール／フィメール、男／女といったカテゴリー、さらには家族やコミュニティという観念を脱自然化し、不安定化する仕方」として定義している[Bailey 2013: 17]。

については、公的／私的という区分は、あらかじめ定められているのではなく、それらの区分が作り出されていくのは、むしろ討議の<sup>せめ</sup>闘い合いのなかからではないか、というのがハーバーマスへの彼女の反論の概略である[Fraser 1992: 117-129/ 129-147]。

これらのうち、人々のアイデンティティ、選好、利害が、公共圏での討議に先立って与えられているのではなく、むしろ公共圏での討議の結果であることが、(1)と(2)への批判のなかで示されていたが、ボールルーム・コミュニティは、パフォーマンスを通じてではあるが、それがアイデンティティ再形成の場であるかぎりにおいて、対抗的公共圏としての条件を幾分かは備えていると言えよう。しかし、フレイザーは、(1)についての議論のなかで、多元的な公共圏間の相互関係に言及しながら、これらの対抗的公共圏の二重の機能について、「一方では、撤退と再編成の空間として機能し、他方では、より広範な公共性を志向する扇動活動のための基地と訓練所として機能する」と述べていた[Fraser 1992: 124/ 140]。これらの公共圏間で互いにさまざまな議論が交わされ、そこに「より広範な公共性」が形成されてこそ、国家に対して均衡を図る、非政府的なレベルでの討議による意見の集合体としての「世論」が生み出されることになる、と彼女は言うのである[Fraser 1992: 134/ 153]。だとすれば、「撤退と再編成の空間」、閉じられたクローゼットとしてのボールルーム・コミュニティが、公共圏を自称するために欠けているのは、まさに他の公共圏に対して開かれ、それらとの間のさまざまな関わり合いを通じて「より広範な公共性」を求めようとする志向、その「開在性」ではないだろうか。

しかし、今や、ボールルーム・カルチャーのネットワークは、全米、海外にまで及ぶ広がりを見せ、各種ソーシャル・メディアを通じてハウス／ボールの情報が広く発信されている。そのネットワークのこうした急激な拡大を考えたとき、ボールルーム・コミュニティは、強力な対抗的公共圏として立ち上がる可能性をおおいに秘めているのではなかろうか。

なかでも、その実現の可能性を予感させるのは、「キキ・シーン」(the Kiki scene)であろう。これは、12 歳から 24 歳の LGBT の若者たちによって作られたシーンだが、「キキ」とは「楽しむ」を意味し、あまりにも競技的な色合いの濃いメイン・シーンに代わりうる「ただ楽しむだけ」の空間を若者たちが確保したかったという事情がそこにはあったという[Bailey 2013: 225]。しかし、このキキ・シーンの立役者、ツイッギー・プッチ・ガーソン(Twiggy Pucci Garçon)に言わせれば<sup>16</sup>、キキはそうしたエンターテインメント以上のもの

<sup>16</sup> ガーソンは、the House of Pucci のマザー、NPO 団体 the True Colors Fund で LGBT の若者のホームレス問題に取り組むアクティヴィスト、サラ・ジョルディノ監督『キキ』の

なのであって、それというのも、キキにはレイシズムに対する抵抗、そして、とりわけ黒人教会のホモフォビア、トランスフォビアに対する抵抗のなかから生まれたという歴史があるからであり、キキ・シーンの鍵となるのはむしろ、社会変革を志向する政治的アクティヴィズム<sup>プラットフォーム</sup>なのである。キキ・シーンの「スター」、ジア・マリー・ラヴ(Gia Marie Love)もまた、今日では『パリは燃えている』の時代とは事情が異なり、彼女たちの世代は、よりアクティヴ<sup>シェルター</sup>であって、自分たちの置かれた状況——人種、トランスフォビア、政治などに関して、ソーシャル・メディアを通じて、ラディカルで革新的な議論を活発に交し合っている、と語り、ボールルームは彼女たちがこの社会のなかで生きるための「基地」なのだ、とも述べている[Yates 2016], [Anderson 2017]。——こうした発言を聞くと、キキ・シーンに結集する若者たちにとって、ボールルームは生き残りのためだけの「避難所」ではもはやないかのような印象を受ける。そういえば、あのベイリーにしても、彼女ら／彼らのこうした動向を示唆する発言を行なっていた。彼によれば、キキ・シーンのメンバーたちは、メイン・シーンの慣行を平然と打ち破ることが多く、たとえば『ブッチ・クイーン、パンプス履いてご登場』執筆当時、彼女ら／彼らは、過去 30 年間にわたり白人たちが非白人を締め出してきた同性愛者の「聖地」、グリニッジ・ヴィレッジの栈橋エリアを「取り戻し」<sup>17</sup>、そこで白昼公然とボールを開催するという企てさえ敢行しようとしていたというのである[Bailey 2013: 225f.]. 全米で"Black Lives Matter"の社会運動が巻き起こっている今日、この若者たちの姿に、私は微かな希望を感じる。

## 引用文献

Anderson, Tre'vell, 2017, "'Kiki' is no 'Paris Is Burning'——and that's a good thing," *Los Angeles Times*, February 24. 2017.

<<https://www.latimes.com/entertainment/movies/la-et-mn-kiki-paris-is-burning-20170224-story.html>> (最終アクセス: 2022/10/21)

Bailey, Marlon M., 2013, *Butch Queens Up in Pumps: Gender, Performance, and Ballroom Culture in Detroit*, The University of Michigan Press.

---

共同制作者であるが、彼女はテレビドラマ『ポーズ』の振り付けにも携わっている。

<sup>17</sup> グリニッジ・ヴィレッジは、1969 年、ゲイ・バー「ストーンウォール・イン」への官憲の強制捜査に抵抗する暴動、「ストーンウォールの反乱」が起きたことで知られる。

- Butler, Judith, 1988, "Performative Acts and Gender Constitution: An Essay in Phenomenology and Feminist Theory," *Theatre Journal*, vol.40, no.4. (「パフォーマティブ・アクトとジェンダーの構成」, 吉川純子訳, 『シアター・アーツ』第3号, 晩成書房, 1995年)
- , 1999, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge. (1st edition 1990) (『ジェンダー・トラブル』, 竹村和子訳, 青土社, 1999年)
- Dickson-Gomez, Julia, et al., 2014, "Beyond the Ball: Implications for HIV Risk and Prevention among the Constructed Families of African American Men Who Have Sex with Men," *AIDS and Behavior*, vol.18, issue 11, Springer.
- Fraser, Nancy, 1992, "Rethinking the Public Sphere: A Contribution to the Critique of Actually Existing Democracy," Craig Calhoun (ed.), *Habermas and the Public Sphere*, MIT Press. (「公共圏の再考——既存の民主主義の批判のために」, 『ハーバマスと公共圏』, 山本啓・新田滋訳, 未来社, 1999年)
- Hilderbrand, Lucas, 2013, *Paris Is Burning*, Arsenal Pulp Press.
- Honig, Bonnie, 1994, "Difference, Dilemmas, and the Politics of Home," *Social Research*, vol.61, no.3. (「差異、ディレンマ、ホームの政治」, 岡野八代訳, 『思想』1998年4月号, 岩波書店)
- Human Rights Campaign, 2022, "Fatal Violence Against the Transgender and Gender Non-Conforming Community in 2022." <<https://www.hrc.org/resources/fatal-violence-against-the-transgender-and-gender-non-conforming-community-in-2022>> (最終アクセス: 2022/11/08)
- リヴィングストン, ジェニー, 1990, 『パリ、夜は眠らない』, VHS, 78分, 字幕: 神田正宗, 配給: アルシネテラン&ジェイ・ブイ・ディー.
- Phillips, Gregory, et al. 2011, "House/ball culture and adolescent African-American transgender persons and men who have sex with men: A synthesis of the literature," *AIDS Care*, vol.23, issue 4.
- 齋藤純一, 2000, 『公共性〈思考のフロンティア〉』, 岩波書店.
- 佐藤知久, 2011, 「社会運動と時間——アクトアップにおけるエイズ・アクティビズムの生成と衰退」, 西井涼子編『時間の人類学——情動・自然・社会空間』, 世界思想社.
- 魚住洋一, 2017, 「パリは燃えているか?——ドラァグ・クイーンたちへのレクイエム」, 『龍

谷大学論集』第 489 号, 龍谷大学龍谷学会. <<http://www.uozumi.net/paris.pdf>>  
——, 2018, 「There's No Place Like Home——ドラァグ・クイーンと「ホーム」の政治」,  
電子ジャーナル『倫理学論究』vol.5, no.1, 関西大学倫理学研究会.  
<<http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/~tsina/kuses/05.01uozumi.pdf>>  
Yates, Kieran, 2016, "Kiki: The wild dance movement formed out of radical resistance,"  
*Huck 56: The Independence Issue*, TCO London.  
<<https://www.huckmag.com/art-and-culture/kiki-vogue-radical-identity-social-change/>> (最終アクセス: 2022/10/23)

(うおずみ・よういち)